

第2回バイオレゾナンス医学会全国大会 が東京都内で開催！

今後、歯科医療の可能性を大きく広げるものとして期待されていると日本歯科新聞に取上げられました。

2011年7月19日（火）掲載

金属撤去で「歯科医科連携」

バイオレゾナンス医学会

波動をキーワードに、歯科と医科を統合した新しい考え方を実践するバイオレゾナンス医学会（矢山利彦理事長）の第2回全国大会が10日に東京都内で開催された。

さまざまな薬品や医療材料、病巣などに特有の波動を特殊な装置で検査し、患者の状態に最適な治療を提供するという考え方のため、中には、歯科用金属の撤去によって全身の不定愁訴を治療する方法を採用することも多く、歯科と医科との連携が大前提となっている分野として知られ、歯科医師の参加者も多い。

バイオレゾナンス医学会とは、矢山氏が開発した経絡エネルギー測定器「ゼローサーチ」を使って、人体のエネルギー的情報を生体共鳴（バイオレゾナンス）によって得

ようとする新しい方法論で、これによって歯科的問題が全身にさまざまな形で影響するのが明らかになっているという。

千葉県でバイオレゾナンス医学に基づく内科、アレルギー科を開業する森正道氏（医師）がバイオレゾナンスに関心を抱いたのは、多くの医療機関で「この病気は治りません。一生、上手につきあっていきましょう」などと治癒しないことを前提としたアドバイス、治療介入がなされている実態に疑問を抱いたからだという。

薬、処置を最適化することで、本当の治療をゴールとした医療を実践する道が開けたという。

大会では、医師、歯科医師の講演だけでなく、デモが多数組まれ、これまであまり知られてこなかったバイオレゾナンス医学の多彩な側面を垣間見ることができた。

杉本勲氏（歯科医師）によると、歯質、歯髄、歯槽骨の感染や生体為害性のある歯科材料によって難治性の症状が現れている現状があるとのこと。特に、インプラントと金属性修復物の組み合わせには相性の悪い患者が多く、臨床でこれらの感染病巣や異物を取り除くことが中心になっていると

のこと。

歯科においては、多くの金属アレルギー治療の現場が医科、歯科の連携不備によってさまざまな困難に直面していることが知られている。一つの疾患に対して両者が診断、処置で連携する方法を、あえて「歯科医科連携」と定義付けているバイオレゾナンス医学会は、今後、歯科医療の可能性を大きく広げるものとして期待されている。



バイオレゾナンス医学の社会的意義について述べる矢山利彦理事長

